2021年3月21日主日礼拝　　大井バプテスト教会

説教題「御心は弱さを通して」マタイ26章36～46節

主任牧師　加藤　誠

「誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い」（マタイ福音書26章41節）。

もうすぐ８９歳になる私の父の愛唱讃美歌は、新生讃美歌 550 番『ひとたびは死にし身も』です。昭和7年生まれの父は二度死にかけています。一回目は13歳で迎えた敗戦時、それまで「神」だと教えられてきた天皇が「ただの人」であると知らされた時。それまで本気で天皇のために死ぬ「良い兵隊」になるのだと信じてきた父は、すべてが偽りだったと知らされて、いったい何を信じたらよいのか分からなくなり、精神的な意味で死にかけました。その深い失望の中、母に連れられて行った教会で、すべての人を愛し、すべての人を生かすために自ら十字架を引き受けて死なれたイエス・キリストを父は知ります。人に「死ね！」と教える神さまではなく、「生きること／愛することの大切さ」を教えてくださる神さまこそ、ほんとうの神だと、父は受け入れたのです。

二回目は十代の半ばに肺結核で片肺の半分を切除する大手術を受けた父は死線をさまよい、死にかけました。手術が成功して、改めて神さまからいただいた命を自覚した父は、神さまの働きのために生きたいと願うようになり、やがて神学校に進み牧師になりました。精神的に、また肉体的に死の危機に直面した父（ひとたびは死にし身）を、聖書のイエス・キリストが救い、神さまの愛につながる新しい命を生きる者としてくださったのです。

この『ひとたびは死にし身も』の二節にこういう歌詞があります。「主の受けぬ試みも、主の知らぬ悲しみも、現世（うつしよ）にあらじかし、いずこにも御跡（みあと）見ゆ」。

私たちは大きな悲しみや苦難に襲われる時、神さまの恵みが見えなくなります。不当な悪意や敵意に囲まれるとき、私たちの愛はカサカサに干からび、生きる意味を見失います。しかしインマヌエルの主イエスは、私たちが経験する試練をご自分の試練とし、私の悲しみも苦しみも絶望も、すべてを知ってくださっている方である。そして十字架から起こされ復活された主イエスが必ず私たちを希望の命につなげてくださる方である。この主の愛に守られて生きていこう…という讃美歌です。

この賛美歌のこの部分を歌うたび、わたしは胸が熱くなります。「主イエスの知らぬ試練も悲しみもない。私たちが歩む現実にはどこにも必ず主の足あとが刻まれている。だから大丈夫。神さまを見上げて歩もう！」という励ましをもらうのです。

今日のゲッセマネの場面でのイエス・キリストは、弟子たちが眠りこけている中、たった独りで神さまと格闘しています。「できるなら、この杯を過ぎ去らせてください（できるならこの十字架の道ではなく、別な道を示してください）」と。一度

ではなく三度も、ほぼ似たような言葉で祈られています。一回だけではダメ。二回でもダメ。主イエスご自身、納得がいってないわけです。「三回」とはユダヤでは何度でも…を意味します。「わたしは死ぬばかりに悲しい」と語り「できるならこの杯をわたしから過ぎ去らせてください！」と、必死に何度も何度も祈っている主イエスの姿は、ある意味では神の子らしからぬ弱々しい姿かもしれません。当時のユダヤ教文献に紹介されているユダヤの殉教者たちは皆、殉教の死を前にしても取り乱すことなく、静かに覚悟を決めて死んで行っているのだそうです。それに比べると主イエスの姿は確かに弱々しい情けないものに思います。

新共同訳 39 節には「少し進んで、うつ伏せになり」とありますが、岩波訳では「顔を大地につけてひれ伏し」となっています。これ以上低くなれないくらい小さくされた状態です。けれども神さまは自らの弱さをさらけ出し祈る主イエスを御自分の働きにお用いになり、御心をなしていかれたのでした。

そしてマタイ福音書は、このように弱さを隠すことなく祈る主イエスこそインマヌエルの神、私たちと共に歩んでくださる神さまであると証しするのです。

ここで主イエスが「（死ぬばかりに）悲しい」と表現されている言葉に心がとまります。何が「悲しい」のでしょうか。それは愛する弟子たちを残して先に死んでいくことの「悲しみ」ではないかと想像します。だとするとここで何度も何度も神さまと格闘しているのは、単に死ぬのが怖いとか不安だというよりも、弟子たちへの深い愛ゆえであることを覚えたいのです。主イエスの「死ぬばかりに悲しい」は、弟子たちへの深い愛が込められた「悲しい」なのです。

そのように主イエスが愛を注いで来られた弟子たちに、主イエスは「目を覚ましていなさい」と繰り返し語ります。弟子たちはふがいなくも居眠りしてしまっているわけですから、「目を覚ましていなさい」は文字通り「目を覚ましてしっかり起きていなさい！」ということでもあるのですが、しかし霊的な意味で言うなら、「目を覚ましていなさい」は「祈ること」であり、「祈りにおいて神とつながる」ことです。自分の弱い所、恥ずかしい所もすべてさらけだしていい。ただ同時に「神さま、あなたはわたしに何を望んでおられますか。神さまの御心を教えてください。御心に従う者とさせてください」と祈りつつ、神とつながること。

けれども心は燃えても肉体は弱いのです。だから私たちは主イエスに従いきれません。けれど主イエスは、その弟子たちの弱さを叱り飛ばしてはいません。弱く情けない私たちだからこそ、目を覚まして祈り、神とつながり、神から愛と勇気と希望をいただきながら、神と共に歩んでいこう！…と私たちに呼びかけ、招いておられるのです。私たちが居眠りし祈ることができず、神さまにつながれないでいる時にも、主イエスは私たちを覚えて祈り続け、私たちのことを捕えてくださっています。が、その関係に甘んじて「わたしは居眠りしていて良い」ではなく、わたしも「霊的に目を覚まして」、主イエスに祈り、主イエスにつながり、そのあとを従う者とされるようにと招かれているのです。